

小林秀雄著『本居宣長』:五十章主題《上古の人々は、死の像(かたち)即ち『死⇒千引石(ちびきいわ)⇒生(とは:生と語らひ、死の心を親身に通はせる)』を、死の恐ろしさ(可畏き/よみの國)の直中から救ひ上げた》その「關係論」的纏め。

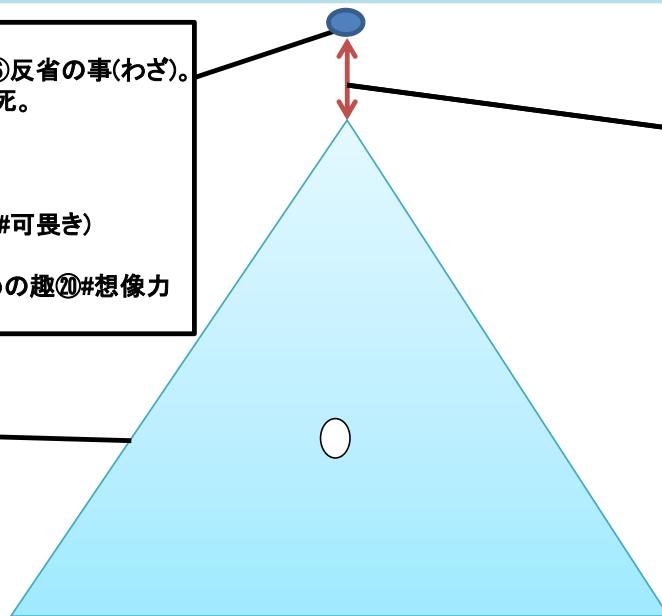
①#禽獸②#ことわざ(#事術)③#物④#遠い昔⑤#生死を觀ずる道⑥反省の事(わざ)⇒からの關係:⑦の考へによれば、[①よりも②しげく],[③の #あはれ をしる]⑩は、④から、#ただ生きてゐるのに #甘んずる事が出來ず、⑤に踏みこんでゐた。(⇒後項へ)⇒⑪#宣長⑫#人間。
①#千引き石(#ちびきいわ)②#黄泉比良坂(よもつひらざか)③#生死⇒からの關係(前項⇒)。③について語らうとして、これ即ち[①を其の②に引き塞(さ)へて、其の石(①)を中に置きて、各(あ)ひ對(む)き立(たたす)]以上直かな表現を思ひ附く事は、⑤には出來ない相談であつた、と④⇒④#宣長⑤#物語の作者達。
①#よみの國②#悲しみ③#無心④意味合⇒からの關係(前項⇒)。[#御國にて上古、ただ死ぬれば、①へ行物とのみ思ひて、かなしむより外の心なく]と⑦に言ふ時、⑧を離れなかつたのは、②に徹するといふ一種の③に秘められてゐる、汲み盡くし難い④だつた⇒⑨門人等⑩#宣長の念頭。
⑤#死⑥#悲しむ⑦#心の動搖(#喜怒哀樂)⑧#沈默⇒からの關係(前項⇒)。⑤を嘆き⑥⑦は、やがて、#感慨の形(#あはれ/#あや)を取つて安定(#生死の安心)するのであらう。この間[#死 #悲⇒#觸れる⇒感慨(あはれ/あや)]の一種の⑧を見守る事を、⑩は想つてゐた(⇒後項へ)⇒⑪#宣長。
⑨#言葉(#答問錄)⑩#死⑪#千引石(#ちびきいわ)⇒からの關係(前項⇒)。それ[沈黙を見守る]が、⑪への⑨の裏に、隠れてゐる。その [見守る沈黙]の内容とは、⑩は⑪に隔てられて、#再び還つては來ない。だが、⑪を中に置いてなら、⑩と語らひ、⑪の心を親身に通はせても來るものなのだ(⇒後項へ)⇒⑨#門人等⑩#生。
⑨#言葉(答問錄)⑩#死⑪#千引石⑫#死の像(#かたち)⑬#恐ろしさ(#可畏き)⇒からの關係(前項⇒)。⑫は、さういふ⑭『死⇒千引石(ちびきいわ)⇒生(とは:生と語らひ、死の心を親身に通はせる)』を、⑪の⑬(#よみの國)の直中から救ひ上げた。(⇒後項へ)⇒⑮#上古の人々。
②#悲しみ⑩#死⑪#死の像(#かたち)⇒からの關係(前項⇒)。⑪の測り知れぬ②に浸りながら誰の手も借りらず、と言つて自力を頼むといふやうな事も更になく、#おのづから(#自然に)見えて來るやうに、その搖がぬ⑭[とは:#死⇒#千引石⇒#生]を創りだした(⇒後項へ)⇒#無名作家達。
⑯死の像⑰意味合⑯彼の世⑯此の世⑯生の意味⑯#神代の始めの趣⑯#想像力の源泉⇒からの關係(前項⇒)。其處に含蓄された⑯は、汲み盡くし難いが、見定められた⑯の⑯[とは:#死⇒#千引石⇒#生]は、⑯の⑯を照し出す様に見える。⑯によれば、其處に⑯を物語る⑯の⑯があつた⇒⑯#宣長の洞察⑯無名作家達。

(物:場 C')...

①#禽獸②#ことわざ(#事術)③#物④#遠い昔⑤#生死を觀ずる道⑥反省の事(わざ)。
①#千引き石(#ちびきいわ)②#黄泉比良坂(よもつひらざか)③#生死。
①#よみの國②#悲しみ③#無心④意味合。
⑤#死⑥#悲しむ⑦#心の動搖(#喜怒哀樂)⑧#沈黙。
⑨#言葉(#答問錄)⑩#死⑪#千引石(#ちびきいわ)。
⑨#言葉(答問錄)⑩#死⑪#千引石⑫#死の像(#かたち)⑬#恐ろしさ(#可畏き)
②#悲しみ⑩#死⑪#死の像(#かたち)。
⑯死の像⑰意味合⑯彼の世⑯此の世⑯生の意味⑯#神代の始めの趣⑯#想像力の源泉

(△枠):

⑯#宣長⑯#人間/④#宣長⑤#物語の作者達
/⑨門人等⑩#宣長の念頭/⑪#宣長/⑫#門人等⑬#生/⑮#上古の人々/#無名作家達/
⑯#宣長の洞察⑯無名作家達。



からの關係(D1の至大化)

*「⑦の考へによれば、[①よりも②しげく],[③の #あはれ をしる]⑩は、④から、#ただ生きてゐるのに #甘んずる事が出來ず、⑤に踏みこんでゐた。(⇒後項へ)」。
*「(前項⇒)。③について語らうとして、これ即ち[①を其の②に引き塞(さ)へて、其の石(①)を中に置きて、各(あ)ひ對(む)き立(たたす)]以上直かな表現を思ひ附く事は、⑤には出來ない相談であつた、と④」。
*「[#御國にて上古、ただ死ぬれば、①へ行物とのみ思ひて、かなしむより外の心なく]と⑦に言ふ時、⑧を離れなかつたのは、②に徹するといふ一種の③に秘められてゐる、汲み盡くし難い④だつた」。
:(前項⇒)。⑤を嘆き⑥⑦は、やがて、#感慨の形(#あはれ/#あや)を取つて安定(#生死の安心)するのであらう。この間[#死 #悲⇒#觸れる⇒感慨(あはれ/あや)]の一種の⑧を見守る事を、⑩は想つてゐた(⇒後項へ)」。
*「(前項⇒)。それ[沈黙を見守る]が、⑪への⑨の裏に、隠れてゐる。その [見守る沈黙]の内容とは、⑩は⑪に隔てられて、#再び還つては來ない。だが、⑪を中に置いてなら、⑩と語らひ、⑪の心を親身に通はせても來るものなのだ(⇒後項へ)」。
*「:(前項⇒)。⑫は、さういふ⑭『死⇒千引石(ちびきいわ)⇒生(とは:生と語らひ、死の心を親身に通はせる)』を、⑪の⑬(#よみの國)の直中から #救ひ上げた。(⇒後項へ)」。以下省略。